

[A年] 降誕前第7主日(2024年11月10日)

【旧約聖書日課】創世記 13章1～18節

1アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。2アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。3ネゲブ地方から更に、ベテルに向かつて旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。4そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。

5アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。6その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかつたのである。7アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。

8アブラムはロトに言った。

「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。9あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」

10ロトが目を見て眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。11ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうして彼らは、左右に別れた。12アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。13ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。

14主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。

「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。15見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。16あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。17さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」

18アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの樫の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙3章1～14節

1ああ、物分りの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか。2あなたがたに一つだけ確かめた

い。あなたがたが“霊”を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。3あなたがたは、それほど物分りが悪く、“霊”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。4あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか。無駄であったはずはないでしょうに……。5あなたがたに“霊”を授け、また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさるのでしょうか。それとも、あなたがたが福音を聞いて信じたからですか。6それは、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりです。

7だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。8聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。9それで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されています。10律法の実行に頼る者はだれでも、呪われています。「律法の書に書かれているすべての事を絶えず守らない者は皆、呪われている」と書いてあるからです。11律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。12律法は、信仰をよりどころとしていません。「律法の定めを果たす者は、その定めによって生きる」のです。13キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです。14それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、わたしたちが、約束された“霊”を信仰によって受けるためでした。

【福音書日課】マタイによる福音書 3章7～12節

7ヨハネは、フェリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蠅の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。9『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみろな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。10斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。11わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。12そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 13章1～18節

1アブラムは妻を伴い、すべての持ち物を携え、エジプトからネゲブへと上って行った。ロトも一緒であった。2アブラムは家畜や銀と金に恵まれ、大変に裕福であった。3彼はネゲブからさらにベテルまで旅を続け、ベテルとアイの間にある、かつて天幕を張った所までやって来て、4初めに祭壇を造った場所に行き、そこで主の名を呼んだ。

5アブラムと一緒にいったロトもまた、羊の群れと牛の群れと多くの天幕を持っていた。6そのため、その地は彼らが一緒に住むには十分ではなかった。財産が多く、一緒に住むことはできなかったのである。7それで、アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが生じた。当時、その地にはカナン人とペリジ人が住んでいた。8アブラムはロトに言った。「私たちは親類どうしなのだから、私とあなた、また私の家畜を飼う者たちと、あなたの家畜を飼う者たちとの間で争い事がないようにしたい。9あなたの前には広大な土地が広がっているではないか。さあ、私と別れて行きなさい。あなたが左にと言うなら、私は右に行こう。あなたが右にと言うなら、私は左に行こう。」

10ロトがヨルダンの低地帯を見回してみると、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その辺り一面は、主の園のように、またエジプトの地のように、ツォアルに至るまであまねく潤っていた。11そこでロトは、ヨルダンの低地帯を選び取った。ロトは東の方へと移って行き、こうして彼らは互いに別れた。12アブラムはカナンの地に住み、ロトは低地の町に住んで、ソドムの近くに天幕を移した。13ソドムの人々は主に対して、極めて邪悪で罪深かった。

14ロトが別れて行った後、主はアブラムに言われた。「さあ、あなたは自分が今いる所から北、南、東、西を見回してみなさい。15見渡すかぎりの地を、私はあなたとあなたの子孫に永く与えよう。16私はあなたの子孫を地の塵のように多くする。もし人が地の塵を数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができるだろう。17さあ、その地を自由に歩き回ってみなさい。私はその地をあなたに与えよう。」18アブラムは天幕を移し、ヘbronにあるマムレの櫛の木のそばに来て住み、そこに主のための祭壇を築いた。

ガラテヤの信徒への手紙 3章1～14節

1ああ、愚かなガラテヤの人たち、十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前にはっきりと示されたのに、誰があなたがたを惑わしたのか。2あなたがたにこれだけは聞いておき

たい。あなたがたが霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、信仰に聞き従ったからですか。3あなたがたは、どこまで愚かなのですか。霊で始めたのに、今、肉で仕上げようとするのですか。4あれほどのことを体験したのは、無駄だったのでしょうか。そうしようとしているなら、本当に無駄になってしまいます。5神があなたがたに霊を授け、あなたがたの間で奇跡を行われたのは、あなたがたが律法を行ったからですか。それとも信仰に聞き従ったからですか。

6それは、「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」と言われているとおりです。7ですから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。8聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを見越して、「すべての異邦人があなたによって祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。9それで、信仰による人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されているのです。10律法の行いによる人々は皆、呪いの下にあります。「律法の書に書いてあることを守らず、これを行わない者は皆、呪われる」と書いてあるからです。11律法によっては、誰も神の前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。12しかし律法は、信仰をよりどころにしません。「律法の掟を行う者は、その掟によって生きる」のです。13キリストは、私たちのために呪いとなって、私たちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆、呪われている」と書いてあるからです。14それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、私たちが、約束された霊を信仰によって受けるためでした。

マタイによる福音書 3章7～12節

7ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「毒蛇の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。8それなら、悔い改めにふさわしい実を結べ。9『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。10斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。11私は、悔い改めに導くために、あなたがたに水で洗礼を授けているが、私の後から来る人は、私より力のある方で、私は、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたがたに洗礼をお授けになる。12その手には箕がある。そして、麦打ち場を掃き清め、麦は倉に納めて、殻を消えない火で焼き尽くされる。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・11月10日「降誕前第7主日」の日課主題は「神の民の選び(アブラハム)」。伝統的な教会暦で、この日は、一年一巡りの終わりの三主日、「終末三主日」に入る「終末前々主日」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、アブラムが同道していた甥ロトと別れた場面を描く説話箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、「アブラハム」を典拠として信仰による義を説く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、洗礼者ヨハネの宣教の言葉を伝える箇所。

旧約日課(創世記13章より)

・「創世記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第一巻に置かれた物語文書。天地創造から始め、イスラエルの祖と位置づけられる族長らの生涯までを描く、民族創生物語。12章以下で展開する族長物語は、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヤコブの息子らまでの四代の家族の物語として描かれるが、大枠は「アブラハム物語」(12~25章)と「ヤコブ物語」(25~50章)に区分される。「イスラエル」との関係では、後者の「ヤコブ物語」が直接の民族創生譚となる。すなわち、「ヤコブ」が「イスラエル」の名を与えられ、その息子たちが「イスラエル十二部族」の祖として位置づけられる。他方で、「アブラハム」は後代の「イスラエル」より広範な周辺部族を含む祖として描かれており、この「アブラハム」と「ヤコブ」の間に生じる溝を埋める緩衝として「イサク」の世代が挟まれていると見ることができる。

・「アブラハム」は、物語の最初では「アブラム」の名で登場し、途中で神から「アブラハム」の名を与えられたと物語られる(17章)。また、「アブラム」は兄弟の「ハラン」および「ナホル」と共に父「テラ」の子として登場するが、この「テラ」に至る「ノア」からの系図が10~11章に延々と展開されており、その中に「バベルの塔」の逸話が置かれることで、彼らがアッカド・バビロニア(メソポタミア下流域)の出自であることを強く主張していると考えられる。実際、「テラ」と三人の息子たちは、ティグリス・ユーフラテス両河がペルシア湾に注ぐ地にある「カルデアのウル」を故郷とする者たちであったとされている(11:28)。この家族のうち、「テラ」と「アブラム」夫妻、また「ハラン」の息子である「ロト」が、「ウル」からユーフラテス上流域に位置する「ハラン」に移住したとされている(11:31)。「ロト」が同行したのは、父親が死んでおり、子のない「アブラム」の後継ぎとして養子になっていたから、という設定だろう。なお、「アブラム」のもう一人の兄弟「ナホル」の家族も、「イサク」や「ヤコブ」の物語では、「ハラン」を含む地方「アラム・ナハラタイム」(24:10)、「パダン・アラム」(28:2~5))に移住していたものとされている。「ナホル」の一族は、「イサク」の妻や「ヤコブ」の妻を出す一族として、繰り返し「族長物語」に登場してくる。

・「ネゲブ地方」は、「ベエル・シェバ」以南の南部砂漠地帯を指す。対して、「ベテル」は、南の「ヘブロン」から北の「シケム」に至る山地帯の中央に位置する聖所都市。アブラムとロトは、「ネゲブ地方」を経て「ベテル」付近に移住しながら、結局別れて、それぞれ「ヘブロン」と「ソドム」に居留したと描かれる。

・「ソドム」は、「ゴモラ」と共に死海南部の湖底に沈んだとされる都市。「ソドムの住民」の「邪悪」さの解釈については、キリスト教とユダヤ教で異なる伝統がある。キリスト教では、英語で「ソドミー」が「同性愛」を意味するように、おもに性的頹廢として解釈されてきた。他方ユダヤ教では、外来者や貧者を拒絶する排外主義として解釈されてきた(19章の説話を参照)。

使徒書日課(ガラテヤ3章より)

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」で第四に置かれた書簡文書。パウロが、シリア・アンティオキアの教会から派遣された「バルナバ宣教団」の一員として宣教したガラテヤ地方の諸教会に宛てて記した。バルナバ宣教団によって実施されたこの地方を含む最初の宣教旅行を経て、パウロとバルナバは宣教方針で対立するようになり、以後、パウロはバルナバ宣教団を離脱して独自の宣教団を組織するようになったと考えられる(使徒15~16章)。本書簡でパウロが強く主張する論点は、そのバルナバとの意見対立を反映していると推察される。

・本書簡においてパウロが強調する主張は、「割礼」や「食物規定」などに顕著に表れるユダヤ人の「律法遵守」が「救い」とは無関係であるばかりか、「救い」の障壁になっているので、キリスト者の教会からは徹底的に排除すべきである、というもの。前提として、パウロは、旧約正典に基づく「救いの共同体」の一員とされることが「救い」である、という救済観に立っている。これは、主イエスの場合も同じで、「福音書」では、「アブラハムの子」という用語を用いて「救いの共同体」を指定している。当時のユダヤ教主流ラビたちは、「律法」や「食物規定」などの「律法」に基づいた生活習慣を厳守する「ユダヤ人」社会を「救いの共同体」と同一視しており、ラビたちの指導のもとで行われる「律法」の解釈に基づいてその枠組みから外れる者は、「ユダヤ人」として生まれた者であっても、「罪人」や「徴税人」として「ユダヤ人共同体」から疎外され、「救いの共同体」の外に置かれると指導していた。初期の弟子(使徒)たちの教会は、「ユダヤ人共同体」から疎外されていた者たちを「ユダヤ人」の代わりに受け入れた主イエスの実践を継承したが、受け入れる対象が「異邦人」でありながらユダヤ会堂に出入りする「神を畏れる人々」(使徒13:16,26など)に拡大する段階で、彼らをまず「改宗者」つまり「ユダヤ人」としての諸習慣を遵守する者とするのか、それともそのようなことは要さずに済ませるのか、ということが議論になった。結論は、後者になったが、一部に「ユダヤ人」の習慣遵守を勧める者たちがあり、混乱が生じたと考えられる。

・パウロは、キリストの實踐に続くことをもって「救いの共同体」に加えられていると考えており、そのしるしとして「キリストと結びつく洗礼」を位置づけている。日課箇所、パウロは、キリストを人が「アブラハムの子」とされるための道を開いた方として理解しているが、それによって、「アブラハムの信仰」がキリストを経て「異邦人」を含む信じる者に継承されたと論じている。これらの主張の前提となっているのは、前段 3:15~21 の議論で、そこでは、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」(2:16)といういわゆる「信仰義認論」の定式が示されている。この句の直訳は、「人は、ただイエス・キリストの信仰を経ずに律法の実践から義とされるのではない」。この句の解釈は、一連のパウロの主張が、一般的な救済原理を提示するためではなく、「異邦人」を全面的に「救いの共同体」へと受け入れる道筋を明らかにするためになされている(3:14)ことを踏まえてなされるべき。

福音書日課(マタイ3章より)

・日課箇所は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことと絡めて、洗礼者ヨハネの宣教の言説を伝える箇所、四福音書が同様のことを伝えている。
 ・洗礼者ヨハネは、キリスト教会において主イエスの先駆者と位置づけられる人物。1世紀後半のユダヤ人歴史家フラヴィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』でも取り上げられており、当時のユダヤ人社会の中では著名な宗教家であったと考えられ、現代まで存続するマンダ教は洗礼者ヨハネを最高指導者と位置づけるグノーシス系の宗教であるが、2世紀以降にユダヤ教主流となったラビ・ファリサイ派系ユダヤ教の伝統の中では彼への言及は見られない。四福音書が洗礼者ヨハネを主イエスに洗礼を授けた先駆者と位置づけるのは、事実、主イエスがヨハネのもとで、おそらく弟子の一人として活動した時期があったことを反映していると考えられる。「マタイ」は、ヨハネと主イエスの宣教スローガンが同一であったと明示している(3:2、4:17)。
 ・日課箇所のような洗礼者ヨハネの宣教言説を伝えるのは、主イエスの宣教言説との共通点と相違を明確にする意図によると考えられる。洗礼者ヨハネの宣教言説は、「罪の自覚」と「悔い改め」の勧めに重点が置かれており、「赦し」や「救い」の確約は告げられない。ヨハネの實踐していた「洗礼」も、「罪の告白と悔い改め」のしるしと位置づけられている。これらは主イエスの(教会の)「洗礼」の前提ではあるが、すべてではなく、重点は「赦しと救い」に移されている。

来週の誕生日 (11月10日~16日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-11「感謝に満ちて」(= I 2「いざやともに」)は、17世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンクルトの作詞作曲。1630年ごろ自らの子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリ

ューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自曲に用いている。

- ・21-504「主よ、み手もて」(= I 285番)は、19世紀スコットランドの牧師ボナーの作詞に、19世紀の作曲家ウェーバーの「魔弾の射手」序曲の旋律を讃美歌用に編曲した曲が組み合わせられている。現代の英語讃美歌集ではほとんど採用されていない。
- ・21-521「とらえたまえ、われらを」(= I 344「とらえたまえ、わが身を」)は、20世紀米国長老派牧師 W. フォークスが作詞、同じく長老派牧師 C. ローファーが作曲。ローファーが1918年のある会議の最中に書いた曲にあわせて、フォークスが青少年向き讃美歌として作詞。日本語版は1954年『讃美歌』から。

21-11「感謝にみちて」

Nun danket alle Gott

1. Nun danket alle Gott, / Mit Herzen, mund und händen, / Der große dinge thut / An uns und allen enden, / Der uns vom mütterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetztund gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm leben, / Ein immer fröhlich's herz / Und edlen frieden geben, / Und uns in seiner gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, ehr' und preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen himmelsthronen, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetztund und immerdar.

21-504「主よ、み手もて」

Thy way, not mine, O Lord

1. Thy way, not mine, O Lord, / However dark it be: / Lead me by thine own hand: / Choose out the path for me. / Smooth let it be or rough, / It will be still the best; / Winding or straight, it leads / Right onward to thy rest.
2. I dare not choose my lot; / I would not, if I might; / Choose thou for me, my God: / So shall I walk aright. / Take thou my cup, and it / With joy or sorrow fill, / As best to thee may seem; / Choose thou my good and ill.
3. Choose thou for me my friends, / My sickness or my health; / Choose thou my cares for me / My poverty or wealth. / Not mine, not mine the choice, / In things or great or small / Be thou my Guide, my Strength, / My Wisdom, and my All.

21-521「とらえたまえ、われらを」

Take Thou Our Minds, Dear Lord

1. Take Thou our minds, dear Lord, we humbly pray, / Give us the mind of Christ each passing day; / Teach us to know the truth that sets us free; / Grant us in all our thoughts to honor Thee.
2. Take Thou our hearts, O Christ, they are Thine own; / Come Thou within our souls and claim Thy throne; / Help us to shed abroad Thy deathless love; / Use us to make the earth like heaven above.
3. Take Thou our wills, Most High! Hold Thou full sway; / Have in our inmost souls Thy perfect way; / Guard Thou each sacred hour from selfish ease; / Guide Thou our ordered lives as Thou dost please.
4. Take Thou ourselves, O Lord, heart, mind, and will; / Through our surrendered souls Thy plans fulfill. / We yield ourselves to Thee—time, talents, all; / We hear, and henceforth heed, Thy sovereign call.